保管用

海邦養秀ネットワーク構築事業実行委員会

沖縄県知事公室広報交流課

平成27年度

海邦養秀ネットワーク構築事業

報告書

ドイツの「家族」に会いに行こう！

事業委託：（特活）沖縄ＮＧＯセンター（Okinawa NGO Center）

はじめに

はいさい、ぐすーよー　ちゅーうがなびら！

沖縄県民の海外移住は1899年のハワイ移民を始まりとし、20世紀には多くのウチナーンチュが新天地を求めて海を渡りました。今日では世界各地に約40万人の県系人が各分野で活躍しており、沖縄と世界の架け橋として国際交流・協力に大きな役割を果たしております。

沖縄県の策定する「沖縄21世紀ビジョン」では「世界に開かれた交流と共生の島」を掲げ、世界中で活躍するウチナーンチュとのネットワーク強化、特に次世代の担い手となる若者の育成に力を入れて取り組んでいるところです。

「海邦養秀ネットワーク構築事業」は、沖縄県内の15歳から25歳までの学生を海外沖縄県人会へホームステイ派遣し、海外県系人の雄飛の精神や、国際感覚を学ぶとともに、海外の同世代のウチナーンチュとの友情を育むことで、将来にわたってウチナーネットワークを発展させていくことを目的としています。2007年からスタートし、2014年までに6か国の12県人会へ88名の若者を派遣してきました。

2015年は初めてのヨーロッパ、ドイツ連邦共和国ドイツ沖縄県人会へ高校生6名、大学生4名の計10名を派遣することができました。

2015年は戦後70年の節目の年です。ドイツと日本はともに敗戦国であり、それぞれ復興し、発展をとげました。今回の研修では、ドイツ国際平和村の戦場で傷ついた子供達との交流、平和学習でのドイツの学生との意見交換などのプログラムがあり、平和について改めて考えるよい機会となりました。

また、環境省でドイツの環境政策を学んだ後、福島から来た学生も含め、ドイツと日本の学生が環境についての意見交換を行いました。次世代を担う学生が国を超えて環境について考え、話し合えたことは大変貴重な経験となりました。

デュッセルドルフでは、日本国総領事館と日本クラブを訪問した際に沖縄出身の職員から話を聞くことで、参加者はウチナーンチュが世界で活躍している姿に刺激を受けました。

研修の締めくくりとなった琉球フェスティバルは、遠く離れたドイツで沖縄文化の素晴らしさを再認識する機会となりました。三線の演奏や空手・エイサーなどの演舞を見て感銘を受け、また、参加者自身がマミドーマーなどを披露し、海外の方々とも沖縄の文化を通じて一つになれることを肌で感じることができました。

今回の海邦養秀ネットワーク構築事業では、ドイツの学生とともにプログラムに取り組むことができ、沖縄とドイツの学生達の間に深い友情をはぐくむことができました。この絆を元に、参加者が「世界へ開かれた交流と共生の島」を実現する原動力となってくれることを期待しております。

結びに、ドイツ沖縄県人会崎原永人会長、シュタインバートギムナジウム松尾馨先生、デュッセルドルフ日本クラブ内間ゆかり事務総長代行、ホストファミリーの皆様をはじめ、本プログラムに御協力いただいたドイツ・沖縄の関係者の皆様には、沖縄と世界を結ぶ若者に貴重な体験を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。

海邦養秀ネットワーク構築事業実行委員会
会長　新垣　秀彦
（沖縄県知事公室秘書広報交流統括監）

目次

・はじめに……1
・参加者……3
・事業スケジュール……4
・現地プログラム日程……5
・現地活動日誌……6
・主な活動について……12
・参加者感想……17
・行動宣言……27
・派遣前アンケート……28
・派遣後アンケート……29
・編集後記……31
・資料……34

出発式

参加者

真久田　彩
琉球大学 3 年

新垣　槙梧
糸満高等学校 3 年

宮城　翔太
大阪大学 2 年

西表　里鶴
沖縄尚学高等学校 3 年

山口　枝梨佳
沖縄キリスト教短期大学 2 年

平　紗文
向陽高等学校 3 年

仲山　夢乃
沖縄大学 1 年

遠藤　舞尋
八重山高等学校 2 年

大山　夏生
首里高等学校 3 年

長濱　大祐
宮古高等学校 2 年

引率者

沖縄県知事公室広報交流課
國場　涼子

特定非営利活動法人
沖縄 NGO センター
上原　真紀

事業スケジュール

日程	内容	場所
	参加者募集告知開始	
5 月 30 日(土)	参加者募集説明会	JICA 沖縄国際センター セミナールーム 201
6 月 10 日(水)	応募〆切(応募者数 115 名)	
6 月 17 日(水) 18 日(木)	面接	沖縄県庁
6 月 24 日(水)	参加者決定	
7 月 4 日(土) 10:00～17:00	**第 1 回事前研修** 内容:全体オリエンテーション、自己紹介、ドイツ紹介、移民学習、役割分担、琉球フェスティバル内容検討、第 2 回事前研修に向けて 講師:(ドイツ紹介、ドイツ語講座) Till Weber 氏 次回への宿題:テーマごとにポスター作成	JICA 沖縄国際センター セミナールーム 201
7 月 18 日(土) 9:00～16:00	**第 2 回事前研修** 内容:ポスターセッションによるドイツ紹介、ドイツ語講座、WYUA について、琉球フェスティバルに向けて、ゆんたく会 with 日系人、第 3 回目事前研修に向けて 講師;(WYUA の活動について) 比嘉 千穂 氏 (ゆんたく会) 山城 興太 氏 根路銘 マリア ソレダ 氏	JICA 沖縄国際センター セミナールーム 201
8 月 1 日(土) 10:00～16:00	**第 3 回事前研修** 内容:最終確認、琉球フェスティバルに向けて	JICA沖縄国際センター 多目的ルーム
8 月 10 日(月)～ 8 月 25 日(火)	現地プログラム (次ページに詳細記載)	ドイツ連邦共和国
9 月 26 日(土)	事後報告会	JICA 沖縄国際センター セミナールーム 201

現地プログラム日程

Time	10-Aug	11-Aug	12-Aug	13-Aug	14-Aug	15-Aug	16-Aug	17-Aug	18-Aug	19-Aug	20-Aug	21-Aug	22-Aug	23-Aug	24-Aug	25-Aug
9:00 - 10:00									デュッセルドルフ日本クラブ訪問						ドイツ発	
10:00 - 11:00			ドイツ国際平和村訪問	NRW州環境省訪問	ボン歴史博物館			ドイツトヨタ訪問	在デュッセルドルフ日本国総領事館訪問	授業参観	スポーツフェスタ参加	琉球フェスティバルに向けての準備	ホームステイ	Ryukyu Festival 2015		
11:00 - 12:00									デュッセルドルフ日本商工会議所訪問							
12:00 - 13:00			昼食	昼食	昼食			昼食	昼食	昼食	昼食	昼食				
13:00 - 14:00													琉球フェスティバルリハーサル			
14:00 - 15:00		移動	シュタインバートギムナジウム訪問	『環境』についてディスカッション	ケルン大聖堂	ホームステイ	ホームステイ	ドイツトヨタ訪問	ツォルフェライン炭鉱見学	平和学習	スポーツ交流会				アムステルダム着	
15:00 - 16:00														懇親会		
16:00 - 17:00										三線交流						
17:00 - 18:00				ホームステイ								ホームステイ		ホームステイ		台北着
18:00 - 19:00			交流会歓迎会					ホームステイ		日本語クラス	ホームステイ		ホームステイ			
19:00 - 20:00	那覇一羽田				ホームステイ				ホームステイ	ホームステイ						那覇着
20:00 - 21:00			ホームステイ													
21:00 - 22:00	東京泊	ホストファミリー対面														

現地活動日誌

1日目：8月10日（月）

【出発】担当：宮城　翔太

今日はいよいよドイツ研修の1日目！初日から問題発生。なんと集合30分前に飛行機の予定が変わって東京で一泊することになりました。

ドキドキの出発!!

2日目：8月11日（火）

【出発】担当：西表　里鶴

11日は朝から羽田→成田→アムステルダム→デュッセルドルフというハードな1日でした。日本時間は日付変わって、朝でしたがドイツに着いたのは夜だったので、長生きした気分になりました！ホストファミリーにも会えて、これからの生活がとても楽しみになりました。

恵まれた環境に感謝し、みんなで力を合わせてこれからも頑張っていこうと思いました！！

3日目：8月12日（水）

【活動内容：ドイツ国際平和村訪問、シュタインバートギムナジウムでの歓迎会】

担当：遠藤　舞尋

今日はオーバーハウゼンにあるドイツ国際平和村を訪問しました。そこでは母国でケガや病気を治療できない子ども達が沢山いました。火傷を負ったり、手足が負傷していたりさまざまでした。ですが、子ども達みんな笑顔でとっても優しい心をもっていました。これまで沢山平和学習をしてきた中で一番あついものがありました。やはり実際にその子ども達と触れ合えたことは大きいです。とても貴重な経験をさせていただきました。

午後からは学校訪問をし、学校で歓迎会をしました。ホームステイ先のパートナーやそのお友達、家族の方々と素敵な交流ができました。

↑ドイツ人パートナーと

←写真提供：ドイツ国際平和村

4日目：8月13日（木）

【活動内容：NRW州環境省訪問、環境ディスカッション】担当：長濱　大祐

午前中環境省を訪問しドイツの環境政策について話を聞きました。ドイツは、2022年までに原発を廃止し再生可能エネルギーに転換を図っていくそうです。再生可能エネルギーに転換を図っている理由は原発が

危ないというだけではなく、安全保障の観点からも図っているそうです。

午後は福島の高校生の体験談を聞き、その後、環境問題や基地問題など幅広い分野についてドイツ人、福島メンバー、沖縄メンバーでディスカッションしました。これといった決定的な策は出ませんでしたが、次世代を担う高校生がこのような話し合いができたことが解決策を見つけるより大事なことだと思いました。

環境についてのディスカッションの様子

5日目：8月14日（金）

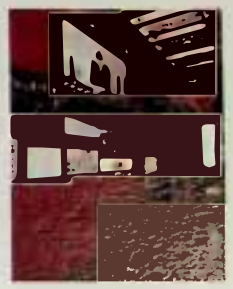
【活動内容：ボン歴史博物館見学、ケルン大聖堂見学】

担当：新垣　槙梧

午前中は、ボンにある歴史博物館を訪れました。ここでは戦時中のドイツについてではなく、戦後から今までのドイツの歴史を学びました。これまで戦時中のナチスドイツ時代のことはよく知っていましたが、戦後のドイツについてはあまり知らず、とても得るものが多い時間でした。

そして午後は、世界遺産のケルン大聖堂を観光してきました。600年かけて築きあげたその大きさ、姿には圧倒されました。ぐるぐるのらせん階段を何百段も上がり、最上階まで行きました。そこからの景色は、上がってきた疲れを忘れるほど素晴らしかったです。

←ケルン大聖堂



ボン歴史博物館→

6日目：8月15日（土）

【ホストファミリーとの一日】

担当：山口　枝梨佳

Die kaffeeというカフェに行ってきました。そこで目にしたのは大量のレシート！今までこんなの見たことなかったので聞いてみると、「カフェ・ソスペーゾ」というものらしいです。少しお金に余裕のある人が一杯分多く支払ってレシートをお店に残し、コーヒーを買うお金がない方でもそのレシートを使えば頼めるというシステムです。初めて知ったので衝撃的でした。素敵だな。

カフェにある大量のレシート

7日目：8月16日（日）

【ホストファミリーとの一日】

担当：大山　夏生

日曜日はGasometer Oberhausenという美術館に行きました。1988年にガスタンクとして稼働していて、今では高さ117mのヨーロッパでもっとも高い展示ホールだそうです。

そして買い物に行きました。ドイツではカートは最初に50¢入れて、カートを返す

時に50¢が帰ってくるシステムで、カートを返さない人がいるので、このシステムになったそうです。そして棚の一角に日本の食材コーナーが小さいながらありました日本コーナーを見ると嬉しくなります。

日曜日はドイツの食文化や歴史について学ぶことができました。

ドイツで発見した“日本”

8日目：8月17日（月）

【活動内容：ドイツトヨタ訪問】

担当：平　紗文

今日はケルンにあるドイツトヨタを見学してきました！朝、出発時の気温はなんと15℃。本当に8月?!って思いました。ドイツトヨタは欧州で車をどのように売り出すか、という戦略を練るところです。車発祥地でもあり、文化やお客様のニーズも違うドイツで日本車を売るのは難しいことで、ドイツでのシェア率は7万台強のうち.4%と苦戦しています。しかし欧州市場に合わせた車を作ったり、ハイブリッド車を作ったりと様々な戦略で頑張り中です！午後は、ＴＭＧ（トヨタ・モータースポーツ有限会社）の見学でした。たくさんのレーシングカーを見ることができ、とてもテンションが上がりました。

ドイツトヨタ訪問

9日目：8月18日（火）

【活動内容：デュッセルドルフ日本クラブ、在デュッセルドルフ日本国総領事館、デュッセルドルフ日本商工会議所訪問、ツォルフェライン炭鉱見学】担当：真久田　彩

デュッセルドルフ日本クラブは、昨年で創立50周年を迎える伝統のある組織で、1年間に1000のイベントや活動が行われています。日本人医師や不動産、ドイツ語教室の紹介など常に掲示板に貼られていて、日本人にとって住みやすい街だと思いました！

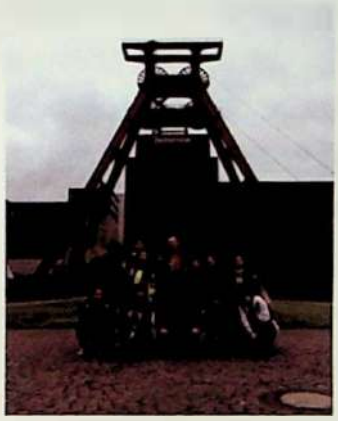
総領事館では、どのような仕事をしているのか紹介してもらいました。館内も案内してくださり、パスポートを発行する機械など貴重な物も見せてもらいました。沖縄出身の職員さんもいて、たまたま来館された方も沖縄の方で、こんなところでもウチナーンチュに会えるんだなと思いました！

日本商工会議所では、デュッセルドルフに日本企業が多く誘致できる仕組みや、取り組みを教えてもらいました。欧州の中でのデュッセルドルフの位置づけや商工業、ビジネスのお話がとても面白くて、自分の中で新しい興味がわきました！

午後はエッセンに移動して、世界遺産に登録された炭鉱の採掘場を見学しました！1931年に造られたそうですが、想像以上に機械化と労働者の組織化が進んでいて、衝

撃的でした。人材の育成も行っていて、本当に驚くことばかりでした。

今日はとても内容の濃い充実した日でした。



ツォルフェライン炭鉱跡

10日目：8月19日（水）

【活動内容：授業参観、平和学習、三線交流、日本語クラス参加】担当：仲山　夢乃

日本人とドイツ人で、平和学習を行いました。1時間半という限られた時間の中だったので、どれだけ有意義な意見交換ができるかは私達の下準備にかかっていました。

・ドイツは隣国との関係はどのようになっているのか。

・敗戦後、ドイツの教育（平和教育など）はどのようになったのか。

私達はこの2点の日本との相違点を主なテーマとして決めました。どうしたらドイツを知ると共に沖縄県を知ってもらえるか、事前に何度も話し合いをした甲斐があって、当日はみんな納得いく意見交換ができました。

その後はドイツ人との三線交流でした。三線を弾くことのできるメンバーが安里屋ゆんたを弾き、残りのメンバーで歌いました。ドイツ人は初めて弾く人がほとんどでしたが、とても楽しそうでした。

三線交流の様子

11日目：8月20日（木）

【活動内容：スポーツ交流】

担当：山口　枝梨佳

午前中は学校のスポーツ大会！体育館組と陸上競技場組に分かれました。私は陸上競技場に行きました。上級生は先生方のサポートという形で競技には参加せず、結果の記録や設営などを行っていました。そして、なぜか見ているだけの私達も参加することができました。メンバーのり一づがやってくれました。輪（とはちょっと違う）投げ。彼女はやり投げをしているので、ドイツの下級生達と桁違いの記録を出し、見事に記録更新。下級生達は口をあんぐりさせていました。

午後は待ちに待った私達のスポーツ交流！種目はバドミントン！大盛り上がりでバドミントン大会が幕を閉じました。しかし！なんと沖縄とドイツに分かれてもう1種目やることにということでドッジボールをしました。終始沖縄チーム優位でしたが…ファビアンがなかなか当たってくれない!!!当たらない!!!終わらない!!!最後の最後でラッキーなこともあり、結果沖縄チーム勝利！

スポーツは壁がないなと感じました。言葉がなくともとても楽しいしたくさん笑いました。

スポーツ交流後

12日目：8月21日（金）

【活動内容：琉球フェスティバル準備】

担当：仲山　夢乃

朝デュイスブルク駅に集合して近くの広場でマミドーマーの道具作りをしました。実は、道具はそれぞれ持参した材料で作ることになっていて、ラップの芯や段ボールなど、各自で用意しました。マミドーマーリーダーのまひろが気を利かせて絵具を買ってきたりしてくれたおかげで、少しずつそれらしいものがちらほら。隊形も最終確認して、モチベーションが上がりました。

午後は各自ホストファミリーやパートナーと過ごす予定になっていたのでミニゴルフというものをしてきました。ミニゴルフは、18種類の様々なレーンで、何回でボールを入れることができるのかというゲームでした。日本人は、みんな初めてやったそうですが、みんな良い勝負となり大盛り上がりでした！

今日はパートナーとの中が深まった1日のように感じます。

マミドーマーの道具作り

13日目：8月22日（土）

【活動内容：琉球フェスティバルリハーサル】

担当：宮城　翔太

朝みんなで集まって琉球フェスの練習。いい感じに仕上がってきました！道具は全部手作り。ただこのフェスが近づいてくるにつれてこの研修も終わりが近付いているかと思うと泣きそうです。

午後は会場があるデュッセルドルフに移動して実際のステージで練習しました！崎原さんの三味線と歌声を生で聞いて鳥肌たちました。伝統芸能やっている人ってかっこいい。

その後解散して僕らはピクニックに行きました！あまりなじみがないピクニックですがダンスしたり鬼ごっこしたりとのんびり過ごしました。近くで結婚式があったのか花嫁と花婿がいてとてもきれいでした。

ドイツ人パートナーとのピクニック

14日目：8月23日（日）

【活動内容：琉球フェスティバル】

担当：遠藤　舞尋

今日は琉球フェスティバルがありました。第1回目の事前研修からこのフェスに向け取り組み披露するマミドーマー、クイチャーの練習を重ねてきた私たちにとってドキドキの本番当日。最初はみんな緊張した面持ちでしたが練習より声もでていて踊って

いてとても楽しかったです！くいちゃーの時は会場のお客さんやドイツ人パートナー、ホストファミリーを巻き込んでみんなで踊りました。こんなに盛り上がるとは思っていませんでしたが、会場一体になってくいちゃーを踊っているときはとても胸が熱くなりました。エンディングでカチャーシーをしてフェスが終わった直後…なんとドイツ人パートナーからサプライズでプレゼントが！研修も終盤になり改めてみんないろんな感情を抱き、たくさんの出会いがあり、この機会に感謝でいっぱいだと感じました。

琉球フェスティバルでの様子

15日目：8月24日（月）

【帰国】担当：新垣　槙梧

朝早くからのフライトだったのにもかかわらず、たくさんの人たちが見送りに来てくれました。ホストファミリー、パートナーと笑顔でサヨナラを言うつもりでしたが、いつの間にかみんな涙があふれていました。私たち10人は同じ期間、同じドイツで、同じスケジュールをこなしてきました。しかし、そこから学んだことは10人それぞれ違うものだったと思います。そしてその学びは、きっとこれからの人生の道しるべとなり、糧となり、私たちを支え続けるものになるでしょう。今回出会ったすべてのみなさん、ありがとうございました。ドイツと沖縄の繋がりはより固く結ばれました。また、いつか会いましょう！チュース！

空港にて。再会を約束してお別れしました。

16日目：8月25日（火）

【帰国】担当：大山　夏生

ただいま！沖縄！

アムステルダム→台北→沖縄と世界一周できたような1日でした。ドイツから帰る時は朝早くてお別れと言う実感がなかったのですが、飛行機に乗って遠くなっていくドイツを見ると実感が湧いてきてさびしくなりました。またホストファミリーや県人会の方、松尾先生に会いにドイツに行きたいです！

ドイツで学んだ貴重な経験をこれからに活かせるよう努力したいです。

このような貴重な機会をいただき、関わった方々本当にありがとうございました。

主な活動について

ドイツ生活

宮城　翔太

ドイツの市場について紹介します。基本的に日本の市場とそんなに変わらなくて、お年寄りの方がたくさんいました。ただ、やはりドイツの市場だけあって、パン、チーズ、ソーセージ専門の屋台があってたくさんの種類をおいていました。ドイツの市場に限ったことではないのですが、私たちが行った時期に蜂が大量発生していて、どこに行っても蜂がたくさんいました。特にこの市場では蜂が多かったように感じます。

ドイツの市場

学校生活

遠藤　舞尋

ドイツでは 6 歳で日本の小学校にあたる基礎学校に入学し、卒業する 10 歳で将来の道の選択を強いられます。中等教育には、①就職し、職業訓練を受ける基幹学校。②職業専門学校への進学を目指す生徒が進む 8 年制の実科学校。③大学進学希望者が進む 8 年制のギムナジウムに分かれます。高等教育には総合大学と専科大学に分かれています。

実際にギムナジウムで授業を受けて感じたことは、ドイツの学校は日本の大学のように、好きな授業を選択し、その授業がある時間に学校にくるので、登校時間や下校時間は各自バラバラです。また、日本の学生に比べてとても積極的で、「今日は私が授業をする」といって生徒が授業をしたり、疑問点があると、あてられる前にすでにたくさん挙手をしていたり、とても面白かったです。

授業参観としてドイツの学校を訪れ、日本との教育の違い、学生の違いを肌で感じることができました。これからの私にとって、とても貴重な経験ができました。

学校の様子

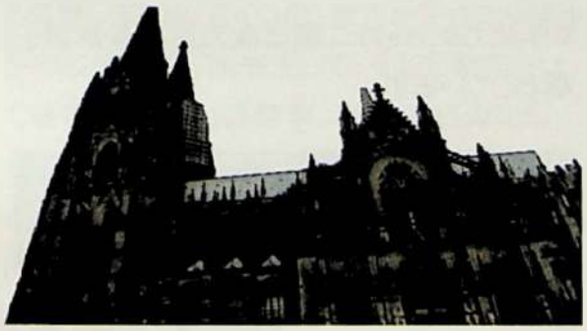
ケルン大聖堂

新垣　槙梧

ケルン大聖堂は正式名称を聖ペトロとマリア大聖堂と言い、1248 年から約 600 年かけて完成されたドイツで最大の大聖堂です。第二次世界大戦では数発の弾丸を浴びるも崩れるこ

とはなかったようです。1966 年から世界文化遺産に登録されています。

ケルン大聖堂は、まさに自分が想い描いていたヨーロッパの教会！という感じでした。ほとんど見られないようなところまでに綺麗に装飾されていて、ドイツ人の美への追求心が感じられました。今でこそ自然との調和で美しい街並みが整っているドイツですが、伝統的建造物の人工的な美しさはその中でも一段と輝いていました。この美しさはこのような細かなこだわりが集まってできているんだなと感じました。また、キリスト教とドイツの歴史的な深いつながりも感じました。ケルン大聖堂は大きすぎて教会であることを忘れてしまいそうでしたが、中では教会らしいことが行われていて、とても神聖な雰囲気が漂っていました。観光とかそういうことがなかった時代に、純粋に神をあがめてこんな大きなものを石器し、何百年もかけて実際に造り上げたドイツの人々の信仰心は昔から受け継がれているのだと感じました。



ケルン大聖堂

ボン歴史博物館

西表　里鶴

ボン歴史博物館では主に第二次世界大戦後から今日に至るまでの現代史を学ぶことができ、時代の移り変わりを見ることができます。ドイツでは、ナチス時代の過ちを二度と繰り返さないために、戦争に関する当時の資料を『情報公開』をすることが一番の義務であり、平和を目指すための一番最初の方法であると考えています。博物館には、戦後の復興の歩みが分かるドイツのみどりの党による政治政策や、東西ドイツ時代の経済格差の問題や、冷戦時代、ベルリンの壁崩壊…と 1 日では見つくせない内容があります。

敗戦国というより、加害国の立場に重点を置いて真摯な態度で、戦後の課題や隣国との関係を改善していこうとするドイツは、今の日本をより良い国にするための、良い手本になると思いました。

ボン歴史博物館

ドイツ国際平和村

平　紗文

ドイツ国際平和村での主な活動は①貧困、戦争で傷ついた子どもたちを受け入れ、治癒して母国へ帰す②子どもたちの母国の医療状況を改善する活動③多くの人に平和について考えてもらう活動の3つです。職員の方のお話で印象に残っているのは、子どもたちのケガの原因についての話でした。施設にいる子どもたちは骨髄炎や火傷が原因の子が多く、母国の医療環境が整っていないため深刻化してしまうそうです。他にも、戦争には直接関係な

いけれど、戦争が起こったため、その二次被害でたくさんの子どもたちがケガや病気で苦しめられている状況です。この話を聞いて、戦争がなくなれば平和になる、という私の考えは大きく変わりました。

その後、子ども達と広場で交流をさせてもらいました。ひどいケガを負っていることを少しも感じさせないくらい元気で、日本の子どもと変わりないくらい前向きで無邪気で、パワーがあふれかえっていました。その姿を見て、最初はギャップに戸惑いました。今までたくさん平和学習をしてきましたが、平和村での体験が1番戦争の恐ろしさや醜さを感じることができたと思います。遠い昔に終わっていると思っていた戦争は、いまだにおこっている場所があって、たくさんの人、それも自分より幼い子たちも傷ついているという現状を目の当たりにして、改めて平和について考えさせられました。そして、教育の大事さにも気づくことができました。普段何気なく学校に通っていますが、この生活は当たり前なことではないんだなと思いました。

平和村で見たこと感じたことをたくさんの人に伝え、戦争の怖さを知ってもらい、そして少しでも平和村の役に立てるよう努力していきたいと強く思っています。今回、平和村に訪問したことはとてもいい経験になりました。この経験を忘れずに、将来に繋げていきたいと思います。

写真提供:ドイツ国際平和村

NRW州環境省

長濱　大祐

ドイツは2011年の東日本大震災をきに脱原子力発電を決めました。

1962年から約50年にわたり原子力発電を行ってきたドイツが脱原発を決めたのはメルケル首相の考えの変化がありました。もともとメルケル首相は原子力の平和利用については推進の立場でした。しかし、福島第一原子力発電所の事故を受け、「高い技術力を持った国ですら、原子力はコントロールできない」と判断し、脱原発を決めました。

ドイツはエネルギー政策の基本方針として、「安定供給の確保」、「自由競争による適切なエネルギー価格の安定」そして、「環境問題への取り組み」があります。

この基本方針の下、ドイツは2020年までに原発を廃止し再生可能エネルギーへの転換。2035年までに再生可能エネルギーでの発電の割合を60%にし、2050年までに1999年比で90%の二酸化炭素排出量削減を目標としています。

平和学習

山口　枝梨佳

ドイツは日本とよく似た歴史背景を持つゆえに比較されることがよくありますが、実際には何がどう違うのか自分自身よく知らなかったので、直接ドイツ人に話を聞くいい機会になると思いました。ドイツの学生と話したいことがたくさんあり、テーマを決めるのにもだいぶ時間がかかりましたが、「隣国との関係について」また「教育について」の2つのテーマについてみ

んなが一番知りたかったのでこのテーマに決まりました。「隣国との関係について」は、ドイツは多くの国に隣接していながら友好な関係を築いているので、韓国・中国との関係を持つ日本の立場として、どのようにして他国と和解して付き合っているのかを知りたかったからです。また、「教育について」は、第二次世界大戦後、ドイツは国の反省の姿勢をよく取り上げられるので、教育はどうなっているのか知りたかったからです。また、日本は地域によって平和教育の内容が異なります。例えば沖縄なら沖縄戦、長崎・広島なら原爆、東京なら空襲など、差が生じてしまいますがドイツの教科書・教育はどうなのか興味があったからです。

今回平和学習を行って、年下の高校生たちとここまで真剣に対話できることに驚きました。しかも一人一人意見を持っていて、先ほど紹介したように、自分の意見が誰かと違ったとしても自分の意見を大切にして主張していました。そして、どんな質問をしてもちゃんと答えが返ってくるので、学んできた量が違うんだなと痛感しました。ドイツの「教育を受けたり何かを学んだりして、反省をして、そして前を向いて改善に努める」姿勢や、「当たり前のこと、今やるべきことを当たり前にやる」姿勢をとても見習いたいと思いました。私もまず自分の国・地域（足元）をしっかり勉強して固めて、沖縄から世界に平和を伝えていけるように頑張りたいです。

平和学習の様子

日本企業について

仲山　夢乃

今回、ドイツに住む日本人から様々な話を聞き、私が思っていた以上にドイツの中で日本の存在が大きかったことに衝撃をうけました。遠いヨーロッパでも日本という国が受け入れられ、組織を作り機能していて、凄いと思いました。今回のプログラムのように、今後も沖縄とドイツの交流を積極的に深め、いつか日本としてでなく沖縄として、ドイツと関係を築いていけたらいいなと思いました。

ドイツトヨタ訪問

琉球フェスティバル

大山　夏生

事前研修の時から琉球フェスティバルで何をやるかを一所懸命話し合い、沖縄の様子を感じられるマミドーマーと、みんなが一緒になって踊れるクイチャーを踊ることにしました。

本番の会場は多くの人で賑わい、立ち見がでるほどでした。

ロビーには沖縄の料理サーターアンダギーやタコライス、黒糖ケーキ、シークワーサージュースなどが立ち並んでいました。他にも紅型ワークショップや沖縄の島ぞうり、三線があり

とても沖縄感満載のフェスティバルでした。沖縄県人会の外間さんはジューシーとクーブイリチーを作ってくださり私はそのお手伝いをしました。ドイツの方は食べないだろうなと思っていたのですが、「これはなんですか?」「なにが入ってますか?」と興味を持ってくださり飛ぶように売れました。おいしいと言っておかわりまでしてくれたことが本当に嬉しかったです。

舞台では様々な演舞が行われました。ドイツで活動している無限道場の勇ましい空手や棒術、躍動感溢れる太鼓など沖縄の文化が海外で受け入れられ発展している そのことに嬉しく思いました。プログラムが進み、私達の出番。本番では千原エイサー保存会のみなさんの口笛や太鼓会場にいるみなさんの手拍子に助けられみんな笑顔で楽しめました。クイチャーとカチャーシーは会場のみなさん全員を巻き込んで沖縄旋風を起こしました。名前の通りドイツ人、ウチナーンチュが混ざり、会場一体となって楽しむことができました。まさに最後にふさわしい素敵なフィナーレでした。

沖縄の文化を通して遠く離れたドイツで沖縄の文化を共有し楽しむことができ、文化の力は素晴らしいとおもいました。また、遠く離れた地でも沖縄を忘れず、こうして主催し盛り上げる力はすごいなと思いました。沖縄県人会の方もご飯を作ってくださったり人のつながりを感じることができました。沖縄の文化は遠く離れたドイツでもドイツの人々に受け入れられ発展し、沖縄は私達の誇れる文化だと改めて感じました。そして沖縄に興味を持ついい機会になりました。

琉球フェスティバルは貴重で濃厚な経験になりました。この経験はこれからの私達の糧になると思います。この繋がりをこれからも大切にしたいです。

琉球フェスティバルの様子

参加者感想

琉球大学３年 真久田 彩

「面白そう！とにかくやってみたい！」最初はとても単純な動機でした。海外に行った経験もなく、ホームステイや様々な学年の人と数週間行動を共にすることもなく、気がつけば大学三年の春。そんな私が、前向きに何かをやりたいと初めて行動を起こしたのが、この海邦養秀ネットワーク構築事業への参加でした。幼い頃から沖縄の芸能が大好きで、文化交流を目的としたこの事業に興味を持ちました。

事前研修で沖縄の移民史にも触れ、ヨーロッパにも沖縄県人会が多数あることを知りました。現地でも沖縄県人会の方にはとてもお世話になりました。特に、会長の崎原さんとの出会いは、私に大きな影響を与えました。同じ芸能を愛する者として、海外での生活や海外における沖縄芸能を、良くも悪くも事実として受け取ることができました。私が持ち続けてきた理想と、その現実を知る機会を与えられたことは、とても幸運だと思います。芸能とどう向き合い、付き合っていくのか、私なりに考えを深めることができました。彼との出会い、現地で過ごした時間は長いとは言えませんが、私にとって大きな財産となっています。

もうひとつ、ドイツで得た大切な財産は、シュタインバートギムナジウムの仲間です。沖縄から来た私たちを温かく迎え入れ、高校生という多感な時期だったけれど、授業での交流やディスカッションもとても楽しく過ごすことができました。休日には、ステイ先の兄妹を連れての動物園や、日本語クラス以外の友達とのショッピングにも誘ってくれて交流の輪が広がりました。帰国の日には、朝早くに空港に集まってくれて、文字通り涙の別れを経験しました。彼らとは、今でも Facebook や Instagram などの SNS を通じてコメントをしあう仲です。こうした繋がりが少しずつでも続いていることが、とても誇らしく思います。これから大学進学や就職を機に、私たちの世界はさらに広がり、日本とドイツの国境は近づいていくのだと思うと、時がたつのが楽しみでなりません。次に会うまで、もっと成長していようと思える仲間こそが私の財産です。

【黒鳥ファミリー】

大阪大学２年　宮城　朋太

私がこのプログラムに参加したきっかけは、母がこの事業のことをどこかから聞きつけて、応募を勧めてくれた事が始まりだった。普段、面倒くさがり屋である私だが、この事業に関しては珍しくやる気になった、というのも、この事業の派遣先がドイツだからというのが大きな要因である。私は大学でドイツ語を専攻しており、将来ドイツという国に関係のある職につきたいと思っていたので、これは大きなチャンスだ、と感じ応募してみた。説明会に参加したわけではないので、どのくらいの人が応募しているのか見当もつかなかったが、いざ受かってみるとかなり多くの人が応募していた事が分かった。非常に恐縮である。そのうえ、この事業のリーダーをやらせていただく運びとなり、普段の私からしてみると、すごく活発的に思える。研修はほぼ毎週あり、大阪と沖縄の往復はすごく大変で、必修のドイツ語の授業をその度ごとに休まなければならなかった。それでも何とか研修を終え、いよいよドイツへ旅立つ日がやってきた。

出発当日は、初日から飛行機のトラブルで、成田経由で行くことになり、不安を感じたのを覚えている。成田からは特に大きなトラブルもなくドイツのデュッセルドルフ空港に到着した。そこから二週間、私たちのドイツ生活が始まった。今までの人生で一番濃い二週間だったのではないかと思う。毎日、たくさんの新しいことを経験し、夜にはくたくたになって床に就く、といった生活であった。正直、この滞在中はあまり眠れなかった。研修で訪れた場所や、出会った人々が私の刺激となったのはもちろんのことだが、毎日一緒に生活したホストファミリーの方々や、パートナー達と過ごした日々が今後の人生に強い影響を与えるだろう。このドイツ研修は成功であった。

帰国後、明らかに意識が変わったと自分でも感じる。ドイツでの滞在で、幼いころの私の夢と、私が外国語学部へ入学した動機を思い出したのだ。私の夢は通訳、あるいは翻訳家になることで、言語のスペシャリストになりたかったのである。最近では進んで留学生の方たちとコミュニケーションをとるように心がけている。様々な国の人たちと友達になり異文化交流を楽しんでいる。この研修に応募してよかったと心から思う。

【仁木ファミリー】

沖縄キリスト教短期大学２年　山口　枝梨佳

この事業に応募するときに自分の芯となっていたのは「平和」という言葉でした。ドイツの平和に対する姿勢や若者の考えを学びたいと強く思っており、そもそも、「平和」が芯になっているのは、私が沖縄の歴史を背負っているウチナーンチュだからと言う他なく、同じくそれを背負いながら海外で暮らす方々の話もぜひ聞いてみたいと思いました。とても運良く、ウチナーンチュとドイツ人に加え、福島県の方々と行動を共にする機会があり、沖縄県民がどうしても遠くに感じてしまう原発問題をダイレクトに突き付けられ、また、ドイツが福島の原発事故を受けて危惧しすぐに脱原発に踏み切った行動力を知ることができ、衝撃と刺激を受けたことは貴重な経験になりました。ドイツの行動力は生き方にも反映されていて、彼らは正直に考えを伝えるし、正しい・優先すべきと思ったことに迷いもなく向かっていく姿勢は学ぶものがあると思いました。そして、その姿勢は加害国としての反省が影響しているのだろうと平和学習を通して感じました。自分より年下の高校生たち一人ひとりの「学び、反省し、行動する」という平和に対しての芯が通った姿勢を学ぶことができ、一つの目標を達成することができました。

もう一つの目標は、話を聞かずとも県人会会長の崎原さんを身近で感じることで達成されました。三線や歌に乗せて沖縄を伝える光景は忘れられず、沖縄と覚悟を背負って飛び出したことが伝わってきました。ウチナーンチュが持つパワー、特に最終日のカチャーシーは必ず人々をひとつにすることができるし、沖縄の心は世界に平和を発信するために必要だと再確認することができました。

約２週間、自分自身を始め沢山のことに向き合う夏になりました。研修メンバーやドイツの家族・友人と出会えたことを大切にしながら、将来ウチナーンチュとして平和を伝える人になるために、これからも全力で学んでいきます。

【クルテンファミリー】

沖縄大学１年　仲山　夢乃

私は今回この事業に参加して、多くの素敵な出会いがありました。まず一人目は、言うまでもなくホストファミリーの方々です。20代になってからドイツに移住し結婚したという小野さんは、とても陽気な方で、いつもおいしいドイツ料理をたくさんふるまってくれました。小学生のマイクとトモも私ととても仲良くしてくれました。お別れの日に二人からもらったプレゼントは私にとって大切な宝物です。トーマスさんも家庭的な旦那さんで、言葉が通じないながらも歓迎会やお別れ会をしてくださり、ツィマーマン一家には言葉では表せないほどの感謝でいっぱいです。そして二人目はパートナーのファビアンです。彼は長身の優しい男の子で、私のつたない英語を聞き取り、ドイツの話や彼が好きな日本のマンガについて話してくれました。彼は今でも頻繁にメッセージを送ってくれます。遠く離れても気にかけてくれる友人がいることはとても幸せなことだと思います。

そして三人目は県人会の会長の崎原さんです。私たちのホームステイに合わせて開催してくれた琉球フェスティバルでは、崎原さん自身が三線を弾いたり歌たり、沖縄の芸能を披露してくれました。私たちも琉球フェスティバルに向けてマミドーマーを練習し、披露しました。崎原さんのおかげで私は、自分が習っている琉球の文化が世界にも通用すること、沖縄の文化で、芸能で、カチャーシーで、多くの人を巻き込み笑顔になれるのだということを知りました。

今回、人との出会いだけでなく新しい価値観との出会いもありました。平和について、環境について、日本について。外に出ることで新しい考え方に触れ、また私自身の考えにも影響を与えてくれました。ドイツでの経験は、世界を知って沖縄を知る、第一歩になりました。この事業に参加できたこと、この事業に携わり支えてくれた全ての人に感謝し、今後私は沖縄の次世代を担う若者として頑張っていきたいです。

【 ツィマーマンファミリー】

首里高等学校３年　大山 夏生

私にとって海外という言葉は、その言葉を聞くだけでわくわくするところです。日本と違う文化や歴史、習慣。日本にいるだけではわからないたくさんのことを教えてくれます。学校で「海邦養秀ドイツの家族に会いに行こう！」のポスターを見たとき、私は参加しようと心に決めました。ドイツに研修にいけるだけではなく、そこに住んでいる沖縄の人と交流もできることがとても魅力的でした。

研修で印象的だったのはドイツと福島の学生と、環境と平和について話し合ったことです。ただドイツに行っただけではわからないことを、その土地に行き、暮らしている人から聞くことができたのは、テレビを見るより、本を読むよりも重みがあって、とても現実味を帯びていました。ドイツの環境、平和、福島の原発について考えていること、とってきた政策、現在の状況を知ることができました。沖縄のことについても伝えることができ、お互い情報交換ができました。学ぶことは多く、これからの私たちの生活、沖縄に活かしていける中身の詰まった話し合いになりました。

琉球フェスティバルでは言葉や国境の壁を越えた伝統や文化を感じることができました。言葉は通じなくてもみんなで一緒に踊ったカチャーシーは沖縄の文化でつながっていると実感しました。沖縄県人会の方々は沖縄から遠く離れたドイツという土地にきても沖縄の心を忘れず、企画し行動し、助け合うその精神はまさにうちなーのちむぐくるを感じました。勇壮なエイサー、華麗な演舞、美しい三線の音色、沖縄一色に包まれた会場は忘れられない思い出になりました。ドイツの学生が積極的に三線を弾いて歌ってくれたり、ドイツの地で空手が行われていることに嬉しくなりました。沖縄の文化は誇れることで、私もウチナーンチュとして沖縄のことをもっと学ぶべきだと痛感しました。

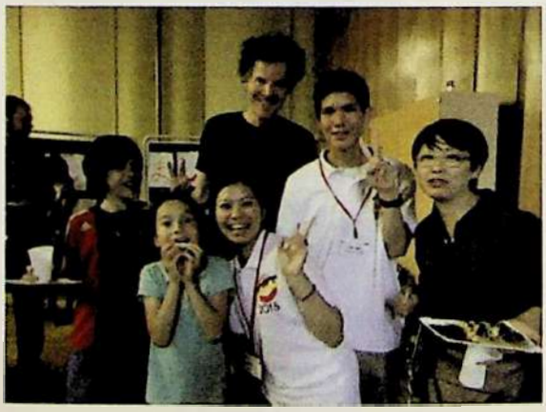
この研修は私を大きく成長させてくれました。行動して、現地で見て、そこで暮らしてる人と話して初めてわかること、たくさんのことを経験し吸収することができました。一緒に切磋琢磨し学んだ12人、まきさん、りょうこさん、県人会の方、ドイツの学生たち、ホストファミリー、崎原さん、松尾先生との繋がりを大切にしていきたいです。このような機会を用意してくださり本当にありがとうございました。

【バウムガーテンファミリー】

糸満高等学校３年　新垣 横悟

私にとってこの二週間の研修は、ドイツ文化を知るだけでなく、日本、そして沖縄を知る二週間でもありました。研修前からドイツ含めて欧州の国々については、新聞やテレビを通して自分の中にはイメージが出来上がっていました。街がきれい、白人で背が高い人が多い、曖昧なことが嫌いなど。今回ドイツを訪れ、そうだったことも、そうではなかったこともありました。街は実際にとてもきれいでしたが、街を歩いているとヒジャブをまとった中東系の女性が歩いているのをよく目にしました。移民問題が深刻化している中、日本で暮らしている限りではその問題も紙面の中だけの話のように感じていましたが、移民に対して寛大であるドイツで初めてこの問題が私の中で現実味を帯びました。移民についてドイツ人学生たちに話を聞いてみると、過去の戦争の反省から移民は寛大に受け入れていると言います。実際にドイツ人の多くが国民として誇りが持てないほどに戦時の過ちを悔悟し、それぞれが平和の実現のために自分なりの考えを持っていました。この過去と向き合う姿勢があるからこそ世界から認められているのだと思います。

日本との違いを感じる一方で、日本を感じることもありました。学生達とマンガやジブリの話で盛り上がったり、お店で「Hokkaido」という名前のカボチャが並んでいるのを見つけたときは何故かうれしくなりました。ドイツから見えた日本は、ユースカルチャーの一部として認知されているようでした。しかし、やはり沖縄について知っている人はまだ少ないです。そこでもっと知ってもらおうと、琉球フェスティバルや三線交流で沖縄の文化に触れてもらうと、皆とても興味津々になり楽しんでいるようでした。中には、三線の演奏を聴いて感動し「沖縄に行ってみたい」と言ってくれる人もいました。この小さな島の文化が遠く離れた国でこのように認められ、広まっていく。そうして私たちは誇りを持ち、文化はこれからも継承されていくのだと思います。今、沖縄の文化は危機的状況にありますが、このように海外でも認められているということを皆に知ってもらいたいです。毎日が新たな出会いと発見の毎日で、刺激的な２週間でした。私は、日々の中でこの経験を皆と共有し、これからの沖縄とドイツのつながりを築いていこうと思います。



【黒鳥ファミリー】

沖縄尚学高等学校 3年 西袁 里鶴

私は小学校 6 年生から3年間、母の転勤でドイツに住んでいたことがきっかけで、ドイツに興味を持ちました。

当時の私は、ウチナーンチュなのに沖縄のことを深く知らなかったけれど、沖縄県人会に入り、沖縄の文化や温かさなどの「良さ」について再認識しました。

日本に帰国すると、今度はドイツについてよく考えるようになり、自分が思っている以上にドイツが好きになっていました。そして今度は自分の意思でドイツに行って勉強したいと思い、応募しました。

ドイツに行くと県人会の方々やホストファミリーが温かく迎えてくれました。現地では平和学習や環境問題についてドイツ人高校生と討論したり、ドイツ国際平和村や環境省を訪問したりすることで多くのことを学びました。特に私はドイツと沖縄の平和に対する意識の違いが一番印象に残っています。ドイツでは「加害国」という立場から自分たちの犯した罪がいかに残酷だったかということを何一つ隠すことなく情報を公開することが、二度と戦争を繰り返さないための第一歩と考え、教育活動にしっかり取り入れています。

こうした真摯な態度で戦後の問題に向き合い、他国との関係を改善していったことで、積極的平和主義のドイツができあがったのだと思います。

一方、日本は敗戦国という立場に重点を置いて、戦争の悲惨さを強く訴えています。特に沖縄の基地問題はよく問題になっています。ここでも、基地があること自体や、それによる弊害が多く取り上げられていて、主観が強く入っています。しかし、反対派の意見と恩恵を受けている人もいるという事実、政府とは矛盾が生じていて強い主観が入っている限り、何でも自分たちの都合の良いように解釈しているままでは何も変わることは絶対にできないと強く思います。

私はドイツに行って、客観的に物事を捉えることが大切だと思いました。そのためには、偏った見方ではなく、情報を公平に公正に流し、教育活動に取り入れ、加害国という立場も忘れずに真摯な姿勢で臨めば近隣国との関係も改善していけるだろうし、よりよい未来を作っていけるだろうと思いました。

また、互いの良いところを取り入れて、学び、高め合い、自然と発展の調和のとれた沖縄を築き、どこに行っても根を張り、人脈を築けることができ、沖縄とドイツの双方の良さを伝えられるような人になりたいと思いました。

向陽高等学校３年　平　紗文

ドイツでの約2週間のプログラムは、本当に内容の濃い充実した期間でした。ホームステイさせていただいたErwig家の皆さんはとても良い方達で、ホストシスターの3歳の子がものすごく懐いてくれて、妹ができたみたいでとても嬉しかったです。ほかにも、家族みんなで買い物に出掛けたり、ロックフェスに行ったり、バーベキューをしたり。ホストファミリーと過ごした時間はとても楽しかったです。

研修では、ドイツ国際平和村や歴史博物館、総領事館など多くの場所を見学してきました。その中でも一番印象に残っているのは、ドイツ国際平和村に訪問した時です。自分より幼い子達が戦争やその2次被害によってひどい怪我を負っていて、しかしそれを感じさせないほど元気に走り回っていたり、無邪気な笑顔で話しかけてくれたりしました。その姿を見て、初めて戦争の恐ろしさや醜さを身近に感じることができました。私のホストマザーは平和村で働いているので、職員の方やジャーナリストの方、ボランティアの方達と食事をする機会が多くありました。その時にも世界で起こっている紛争問題や、平和村についてたくさんお話を聞かせてもらいました。今まであまり関心がない部分でしたが、実際に見たり話を聞いたりするうちに、自分に何かできることはないか、と自然と思うようになりました。将来、平和村に何かしらの形で支援していきたいです。

研修で次に印象に残っているのは、ドイツの高校生との三線交流と、デュッセルドルフで行われた琉球フェスティバルに参加したことです。三線交流では、最初三線を教えた時みんな難しそうにしていたのが、だんだん上達して

いって、最後に歌と合わせた時、楽しそうにやっているのを見てとても嬉しかったです。異国の地で、沖縄の文化を伝えることができて本当に良かったです。また、琉球フェスティバルでは、ドイツ沖縄県人会会長の崎原さんの三線演奏や千原エイサー保存会のエイサーなど、久々に沖縄を感じることができて涙が出るくらい感動しました。自分達が披露したマミドーマーとクイチャーも、お客さんが盛り上がってくれて嬉しかったです。最後に会場全員でカチャーシーをして、文化や習慣の違う地でも皆が一つになることができる、この沖縄の文化はこんなにも素晴らしいものだったんだと気付くことができました。そして、この魅力を世界に伝えたいと強く思いました。

このプログラムで得た経験は、私の中で大きな財産となりました。この貴重な経験を今後、沖縄のために活かせるよう努力していきたいです。

【エルヴィッヒファミリー】

八重山高等学校 2年 遠藤 舞尋

平成27年度海邦養秀ネットワーク構築事業第1回事前研修で私たちメンバー10人は出会いました。それぞれ期待や不安、さまざまな想いを抱えた10人のベクトルは真っ直ぐドイツに向かっていました。出会った初日からドイツ訪問に向けドイツ語や移民についての学習、現地で披露するマミドーマーの練習など様々な活動に取り組みました。メンバーの距離も少しずつ縮まり事前研修を重ねあっという間に出発の日が来ました。私自身初めての海外で緊張でしたがあまりにも長いフライトで到着時にはヘトヘトだったのを覚えています。ドイツに来て初め、街並みや家々がとてもお洒落だという印象を受けました。ドイツは「衣・食・住」のうち「住」にお金をかける傾向にあるようで私のホストのお宅もとても綺麗でした。ヨーロッパの美しい街並みに日々心動かされつつドイツ研修は進んでいきました。

まず、私はこれまで沢山平和学習をしてきました。しかしドイツ国際平和村で実際に子ども達と触れ合った今回は平和の学びとして一番胸が熱くなりました。また、学校訪問でドイツ人学生と平和学習としてディスカッションをしました。その際にドイツと日本の平和や学校の教科書、隣国に対しての考え方の違いを肌で感じました。同時に自分の知識の無さや語学力の無さを痛感した日になりました。

休日、私はホストにお願いし是非とも行きたかったティアハイムに連れて行ってもらいました。日本には無い殺処分をしない動物保護施設です。犬・猫に限らずさまざまな動物が暮しており、その日ティアハイムから犬を引き取っていく人もいました。再度このような施設の重要さを知り日本にもあるべきだと感じました。そして最終日の琉球フェスでは練習を重ねたマミドーマーの披露、ドイツ県人会会長崎原さんの演舞、立ち並ぶ沖縄料理の出店、一気に沖縄色に染まり、海外で沖縄を伝えることができた喜びでいっぱいになりました。

私は二週間の研修で本当に沢山の経験をしました。その中で得た出会いの数々がこれからの私の将来に繋がると確信しています。また、この研修が有意義に過ごせたのはホストファミリーの存在があったからであり、いつも優しかった家族の皆様には感謝でいっぱいです。そして引率の上原さん國場さん含め研修メンバーとの繋がりを大切に自分の将来に向かって進んでいきます。このネットワークは永遠のもので一生をかけて大切にしていかなければならない経験となりました。Vielen Dank!!

【バウトウラファミリー】

宮古高等学校 2年 長濱 大祐

8月10日から8月25日の約2週間ドイツ連邦共和国のデュイスブルグに滞在しました。出発の日に当初は台湾経由で行く予定でしたが台風の影響で行けず東京に行きました。成田空港から出国しました。しかし、成田空港についてもぎりぎりまでチケットがとれるか分からずドキドキしました。ついに出発。飛行機では窓際の席だったので外の景色が見えました。ロシアの上を飛んでいたので常にロシアが見えていて、ヨーロッパに近づくにつれどんどん発展していって、とても興味深かったです。そして、フィンランドを横目にバルト海を越えるとオランダのアムステルダム・スキポール空港に到着しました。眼下に広がるヨーロッパの景色は眠たさも吹き飛ぶほどきれいでした。到着したのが午後9時くらいでしたが、外がまだ夕方位の明るさだったのにも驚きました。

約1時間後いよいよドイツに向けて出発しました。外はすっかり夜になっていました。約30分のフライトでドイツに到着しました。ドイツに着くとホストファミリーに会いました。彼らはすぐに温かく迎え入れてくれたので、すぐに仲良くなりました。

ドイツでは、政治、歴史、文化などいろいろな事を学べました。

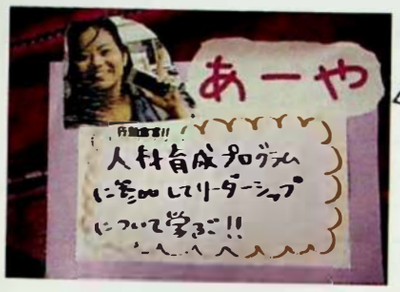
ノルトライン＝ヴェストファーレン州の環境省を訪れ、その州やドイツ全体の環境政策について学びました。

その午後には、一緒に行動していた福島の高校生の震災と福島第一原子力発電所の事故の体験談を聞きました。今までは実際にあるとは理解していてもどこかで、現実味にかける事でしたが、実際に話を聞いてとても、身近な問題になりました。放射線の影響で事故の後は外で遊べなかったことや、県外に避難したことを聞きました。その後、原発の問題や、基地問題、格差・移民などを話し合いました。

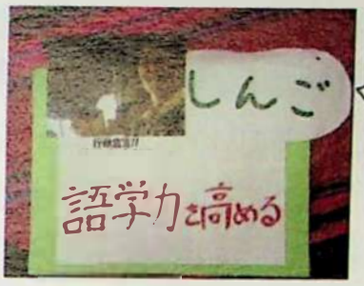
ドイツにはたくさんの世界遺産がありますが、僕たちはそのうちのいくつかを訪れました。その中で僕が一番印象に残っているのは「ケルン大聖堂」です。ケルン中央駅を出るやいなやそこにはケルン大聖堂が悠然とそびえ立っていました。中に入ると立派なステンドグラスがたくさんあり、神秘的な空間が広がっていていました、さらに、大聖堂の展望台に行きました。そこに行くには約540段の階段を上るしか方法はなくとても疲れました。しかし、そこには、すばらしい感動的な景色が広がっていました。ドイツでの約 2 週間の滞在は沖縄や日本では体験できない事ができました。

【フェンマンファミリー】

行動宣言

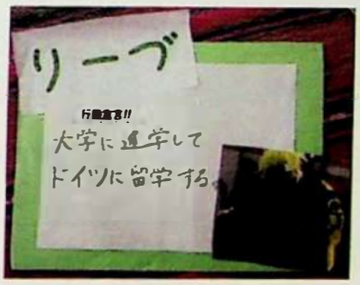


人材育成プログラムに参加してリーダーシップについて学ぶ!!

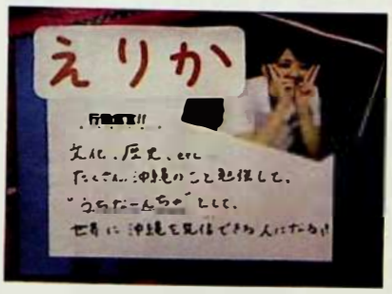


語学力を高める。

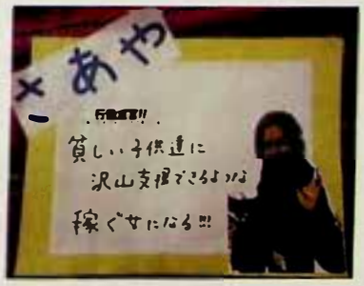
ドイツへ留学します



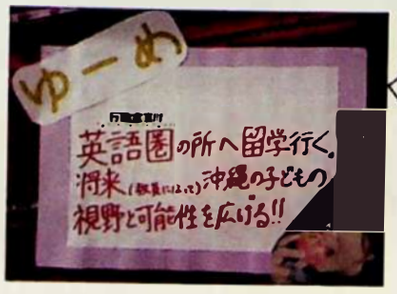
大学に進学してドイツに留学する。



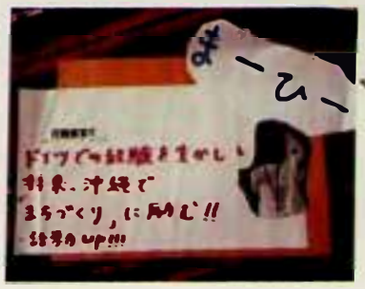
文化、歴史、etc…
たくさん沖縄のこと勉強して、"うちなーんちゅ"として世界に沖縄を発信できる人になる。



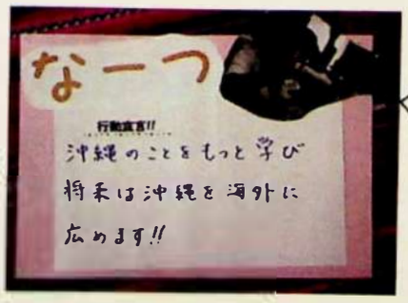
貧しい子どもたちに沢山支援できるような稼ぐ女になる!!!



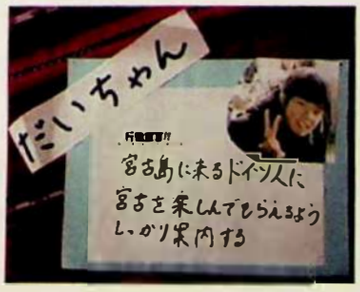
英語圏の所へ留学行く。将来沖縄の子どもの視野と可能性を広げる!!



ドイツでの経験を活かし、将来沖縄で"まちづくり"に励む!!!
語学力 up!!!



沖縄のことをもっと学び、将来は沖縄を海外に広めます!!



宮古島に来るドイツ人に宮古を楽しんでもらえるようしっかり案内する。

派遣前アンケート

Q1. このプログラムであなたが期待していることはなんですか？

	第1位	第2位	第3位
①海外でのホームステイ	2	1	5
②海外県人会との交流	1	5	0
③語学力向上	1	0	0
④海外経験	2	1	2
⑤将来の就職につながるきっかけ	0	1	1
⑥外国の文化・歴史	2	1	0
⑦その他	1	0	1

Q2. ドイツでのホームステイのイメージなど、思い描くことがあれば書いてください。

・学生はしっかり勉強している。お互いに思ったことはハッキリ言いそう。

・ごみの分別や、処理方法など厳しくて、道にゴミが落ちてることがなさそう！食事は、チーズ、ビール、ホットドッグでだんだん飽きてきそう。

・ホームステイでは気を遣われないようにドイツ文化に溶け込みたい。カタコトでもコミュニケーションを大切にし、たくさん話したい。

Q3. 今感じている不安なことを素直に書いてください。

・本当に遅刻しないかどうか。ホームステイ先の家族が変な人かどうか。

・みんなちゃんと仲良くなれるかなーとは最近になってコミュニケーションに自信がないので不安です正直。

・あまりにも言葉が通じなさすぎたらどうしようということ。

・気温の変化についていけるか。日本食がすっごく食べたくならないか。

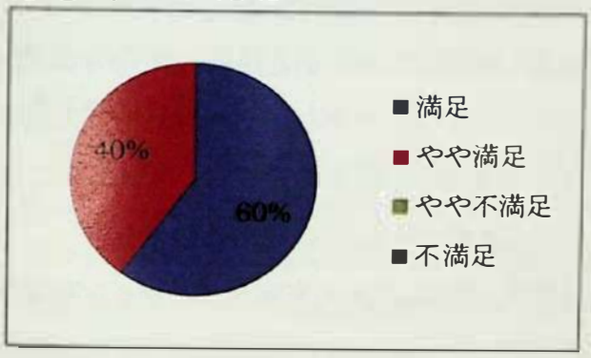
・自分の語学力

・寒さに耐えきれるか不安です。

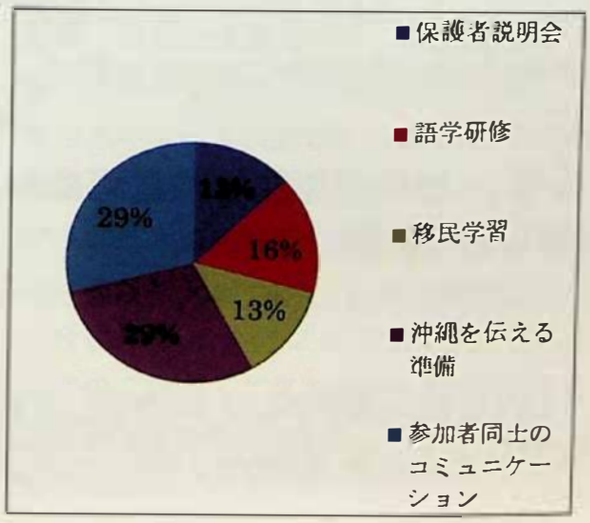
・ホームステイ先の家庭の様子。語学面。気温。

派遣後アンケート

Q1. 今回のプログラム（事前研修、海外派遣、報告会含む）はどうでしたか？



Q2. 事前オリエンテーションは役に立ちましたか？（複数回答可）



Q3. そのほかに事前に学んでいたほうが良かったと思うことはありますか？

・語学よりも習慣を知っておきたかったなと思います。

・沖縄の歴史や文化

Q4. 滞在中ドイツで"沖縄"を感じることはできましたか？派遣先の方々に向けて沖縄を発信することはできましたか？

・毎日、どの瞬間にも感じることはできた。沖縄県の事業であること、県の代表であることを意識していればどんなことにも沖縄を感じたし、そういう姿勢が大切だと思った。

・三線交流や琉球フェスではまさに沖縄にいるようでした。沖縄のスライドショーを見てもらい、沖縄に興味を持った人も増えたと思います。私のホストファミリーは沖縄に行くと言っていました。

Q5. 派遣先の方々との交流はできましたか？

・ホームステイ先の子とマンガの話でもりあがったり、沖縄について話したり、小さい子と一緒にかけっこしたり、生活していく中でドイツの文化や習慣を少しずつ理解していくことができた。福島チームとの合流で環境問題についてより深く知ることができて、さらに良かった。ドイツ国際平和村での交流がより平和について考えることができ、将来絶対に平和村でボランティアがしたいと思いました。一番印象に残っています。

・スポーツ交流：スポーツすると、より壁がなく感じた。一緒に体を動かすと仲良くなれるし、気分転換で来て良かった。

・やはりドイツ人家庭にホームステイしたこと

が一番です。沖縄(自分の島)のことも伝えられたし、ドイツ人の温かさを一番肌で感じることができた。

Q6. あなたが期待したことは、このプログラムで達成することができましたか？

・文化発信 90%
・ドイツ文化を体験する 80%
・平和についての意識を現地の学生と意見交換する 90%
・海外からの沖縄を知る 70%
・ドイツの環境政策について知る 70%
・ドイツで友達を作る 70%
・沖縄を伝える 80%
・ドイツのまちづくりを学ぶ 80%
・ドイツ人に宮古、沖縄を知って来てもらう 90%

Q7. 出発前に不安に思っていたことは、いってみても不安が大きくなったり、問題につながったりしましたか？

・不安:英語力の低さ 結果:想像以上にコミュニケーションとるのが難しかった
・出発前はホストファミリーがどんな人か気になっていたけど、ものすごく良い人で何の問題もなかったです。

Q8. このプログラムで学んだことをどういかしていきたいですか？

・自分の意見をはっきり相手にストレートに伝えること。まず行動に移す(原爆停止から学んだ)。足元をしっかりする=沖縄について勉強。ドイツ人の考え方・働き方スタイルがとても合っていて、自分の生き方にもぜひ反映しようと思った！
・今回のプログラムで一言で表せないほど沢山のことを感じ学びました。ドイツで学んだことは日々の生活にはもちろんですが、私の将来の夢に繋げていきたいとおもっています。またこのプログラムで学んだ「つながり」の大切さを一番大切にし将来の沖縄に、自分の島に少しでも貢献できる人材になりたいです。
・今回、参加してみて文化交流がメインではあったが、チームとしての団結力、統率力を意識する機会がすごく多かった。年齢的にも上ということもあって、リーダーとしての資質やチーム作りに対する興味がわいた。人間関係、コミュニケーション力をもっと学んで全ての職業で必要とされるスキルを身につけたいと思った。

Q9. その他要望・意見等ありましたらお願いします。

・もっと現地の沖縄人と過ごす時間が欲しかった。
・とても貴重な経験をすることができました。ありがとうございます。素敵なプログラムでした。
・先島の人たちに、もうちょっと事前、事後研修時の補助が欲しいです。もうちょっと早くホストを知れた方がいい。
・事前研修で県の代表であるようなことを意識付けができたらもっと良かった。

編集後記

平成２７年度海邦養秀ネットワーク構築事業は、ドイツ連邦共和国へのホームステイでした。この事業で初めてのヨーロッパへの研修に、応募者総数１１５名の中から精鋭１０名（高校生６名、大学生４名）が選ばれました。

事前研修ではおとなしい印象だった参加者は、ドイツに着くと生き生きと積極的にプログラムに取り組んでいました。特に、琉球フェスティバルは参加者にとってかけがえのない経験になりました。ドイツの舞台で堂々と沖縄の文化を発信することができた参加者を誇らしく思いました。

今回の研修ではドイツの学生がパートナーとして行動を共にしてくれました。学校訪問、平和や環境についての意見交換、三線やスポーツを通した交流だけでなく、プライベートも共に過ごし、参加者との間に厚い友情が芽生えました。沖縄とドイツの学生には今後もこの絆を永く大切にしてほしいです。

今回のドイツのプログラムは、多くの方々のご協力・ご尽力が無くては実現することができませんでした。ドイツ沖縄県人会の崎原永人会長、シュタインバートギムナジウム松尾馨先生、日本クラブ内間ゆかり事務総長代行を始めとする関係者の皆様、沖縄の学生のために素晴らしい機会を作っていただき、深く感謝いたします。

また、参加者をサポートしてくれたパートナーの学生、温かく迎えてくれたホストファミリー、皆様のおかげで参加者は充実した２週間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

結びに、参加者がそれぞれドイツで感じ、学んだことが将来の糧となり、それぞれの道で活躍することを心より願っています。

沖縄県知事公室広報交流課
池間　久美子

出発前に行われた事前研修の時から感じたこと、それは参加者の伸び伸びとした個性です。変更が多く、とてもハードなスケジュールだったにも関わらず、文句一つ言わず、いつでも泰然自若で新しい環境から学ぼうとする姿勢をみて、この事業は絶対に成功すると確信しました。参加者10 名の溢れんばかりのエネルギーが、平成27 年度海邦養秀ネットワーク構築事業を成功に導く鍵になったと思います。

参加者のみなさんに一番驚かされたことは、彼らの環境順応能力です。ドイツでは、衣・食・住の「住」(車も含む)に力を入れるお国柄らしく、日本のように「食」に執着しないと伝えられていましたが、実際、ドイツの食習慣はかなり特殊なものでした。例えば、お世話になったシュタインバートギムナジウム(小学校5 年生から高校3 年生が通う学校)には「ランチ」の時間がなく、生徒さんは持ってきたサンドウィッチを休み時間を利用して間食しており、朝・昼・晩時間を決めて食べる習慣を持つ参加者にとって、これはきついだろうと懸念していました。しかし、参加者の皆さんは2, 3 日でこの間食文化に慣れ、ドイツの学生さんと同じように、隙があればもぐもぐと何か食べていました。おそるべし柔軟性に脱帽です。

2 つ目に印象に残っているのは、プログラム1 日目に訪れたドイツ国際平和村での出来事です。平和村は、紛争地帯で怪我を負った子ども達が治療を受けるための施設で、そこでは普段目にしない痛々しい怪我を負った子ども達がたくさんいました。その非日常的な光景の中、参加者はいたって自然に子ども達と触れあい、紙に絵を描いてコミュニケーションをとったり、ミニボールでサッカーを始めたり、おのおの限られた時間を楽しく過ごしている様子でした。実際、心の中では色々な感情がこみ上げていたと思います。しかし、そんな戸惑いを見せず、堂々と遊ぶ参加者の姿に私は感銘を受けました。彼らの優しさには芯があり、それは言い換えると他人を思いやる強さであることを教えられたシーンでした。

「たからだまやてぃん磨(みが)かにば錆(さ)ぴす朝夕(あさゆ)肝磨(ちむみが)ち浮世(うちゆ)渡(わた)ら」。これは、お世話になったドイツ沖縄県人会崎原会長がお別れの時にみんなに送ったメッセージで、「宝玉を持っていても、磨かなければ意味が無い。朝夕心を磨いて浮き世を渡ろう。」という意味の言葉です。まさに、今回ドイツで得た経験、そして参加者それぞれが生まれ持った個性とは「宝玉」であると思います。この「宝玉」を磨き、それぞれの人生の糧にしてほしいと思います。参加者10 名の今後がとても楽しみです。

最後に、若い引率2 名＋学生10 名で構成された沖縄海邦養秀チームをサポートしてくださった全ての方に、心より感謝申し上げます。イッペーダンケシェン！

沖縄県知事公室広報交流課
国場　涼子

今回沖縄全域から集まった 10 名は一人ひとり自分に対する誇りと自信が垣間見え、頼もしく感じたのを覚えています。実際、ドイツ滞在中は海外経験が少ないとは思えないくらい堂々と行動しており、皆さんの行動力には驚くものがありました。

今回は沖縄文化を発信する機会が多くあったことがプログラムの特徴になりました。特に印象的だったのは、琉球フェスティバルで披露した『マミドーマー』と『クイチャー』です。本番当日、沖縄から遠く離れたドイツで、あの時間・空間は沖縄色に染まり、来場者が沖縄について興味を持ち、熱いまなざしで舞台を観ている様子は海外の中にある沖縄を誰もが感じました。さらには、参加者自身が練習を重ねた『マミドーマー』と『クイチャー』を披露できたことは、彼らにとってウチナーアイデンティティを強く感じ、大きな刺激になったでしょう。

****

参加者のみなさんへ

参加メンバーのみなさん、お元気ですか？派遣報告会が終わりみなさんと連絡を取る機会が減り少し寂しく感じながらも、みなさんの生活の中でこの経験がどのように活かされているのかと、ふと想像することがあります。

みなさんにとって、このプログラムはどんなものでしたか？　私にとってはみなさんの行動力は頼もしく、『沖縄の将来は明るいな』とそう確信した 16 日間でした。全 3 回の事前研修を通してグっと団結力も深まり、みんなでワイワイ出発に向けて盛り上がる！という私の想像とは違っていましたが・・・。同じ時間を過ごすうちにそれぞれの輝く個性が見えてきました。大学生リーダーを務めてくれた翔太、リーダーお疲れさまでした！みんながだんだんと殻を破っていく中で、翔太はなかなか殻を破ってくれず…。今度会う時を楽しみにしています！高校生リーダーのだいちゃん、意識的なのか無意識なのか、だいちゃんの発言と宮古イントネーションには人を和ます力があります。大人になってもそのままでいてください。あーや、のんびりとしているけど、核心をつく発言にはドキっとさせられる時があります。きっと周りを引っ張っていける人になると期待しています。しんご、素敵な「ドイツ派遣」のビデオが思い出の形になりました。ありがとう。ドイツでビデオを撮っている姿は、まるでみんなのお父さんでした。なーつ、だんだん慣れてきて、みんなに対するツッコミが面白かったです。留学先でもたくさんのことを吸収してください。えりか、いつも前に出てくるわけではないけど、ここぞ！という時にみんなを引っ張ってくれて、まとめてくれてありがとう。ゆーめ、元気で笑顔が素敵なゆーめ。この経験を将来、子どもたちの教育に活かしてください。さあや、クールだけど胸の中にある熱いものを、温めていつか爆発させてください。りーづ、このプログラムを通して再度ドイツを訪問できたことが、りーづの新たな一歩になることを期待しています。まひろ、いろんな地域を訪れ、それを参考に、将来の石垣のまちづくりを引っ張っていって下さい！

このプログラムを通してみなさんに出会えたことをとても嬉しく思います。これからのみなさんの活躍を楽しみにしています。

最後に、このプログラムにご協力をいただいたドイツ沖縄県人会をはじめ、本事業をサポートしていただいた全てのみなさまに感謝申し上げます。

特定非営利活動法人沖縄NGOセンター
上原　真紀

資料

教育

毎週水・日曜に掲載

意見・問い合わせは TEL 098(860)3552 FAX 098(851)5300

県のドイツ派遣事業参加

故郷・沖縄を通して絆

寄稿 真久田彩（琉大3年）

沖縄の若い世代が海外の県人会と交流を深める「海外県人会ネットワーク構築事業」（主催・県）から8月に行われ、若者10人がドイツに2週間派遣された。現地での経験や感想を、参加した真久田彩さん＝琉大3年＝に寄稿してもらった。

真久田彩さん

交流を深めた沖縄とドイツの若者たち＝ドイツ

◇　◇

二様の音色と指揮。ここは沖縄かと思ってしまう。周りを見渡せば肌の色や髪の色、瞳の色も違う。ああ、やはりここは外国だと現実に引き戻される。それでも、そこにいる人々の表情は同じ。とても楽しそうに見えた。

この夏、ドイツで過ごした約2週間は、初の海外体験だった私にとって財産になった。特に印象に残っているのは歌フェスティバル、現地の人々とウチナーンチュが一緒になって歌い踊る光景は美しく、目に焼き付いている。

ドイツの沖縄県人会は、異なる州に住んでいる会員も多く、頻繁には集まれないと聞いていたが、この日のために電車で7時間もかけて来てくれた人もいて、ウチナーンチュの温かさと優しさを心で感じた。

県系人は、留学を学びに来た人や、日系企業に勤める人、結婚を機に移住した人などさまざま。共通するのは、ドイツという遠く離れた地でも故郷を忘れず、ウチナーンチュとしてのアイデンティティーや誇りを持っていることだ。言葉や文化は国境を超えると身を持って実感した。

理由も年代もばらばらにこの地にやってきたであろう人々が、沖縄という故郷を通じてつながり、仲間になる。その絆の強さ、頼かしさ。私の中で、家族でも友人でもない新たなカテゴリーが生まれたように思う。

今回の派遣メンバーは、高校生、大学生という若い世代が集まった。それぞれ進路や将来について模索する大事な時期に、海外を肌で感じ沖縄を見詰めるという経験ができたことは、私たちにとって大きな刺激になった。ここから大きく羽ばたき、新しい沖縄を築けると確信している。

沖縄タイムス　2015年9月13日（日）

若い世代で沖縄の輪

県派遣10人、交流広げる

三線・空手・エイサー紹介も

【西部ゆかり通信】若い世代を海外の青年会にホームステイ（同居子会員の相手）国際ネットワーク（国際事業）で、8月1日から2週間、県内外の大学生・高校生ら10人がドイツを訪問した。ドイツの家庭や学校を通して歴史・文化を学び、交流会やワークショップなどで沖縄のつながりの輪をドイツに広めた。

三線・空手・エイサーを紹介する学生たち（ツォルフェライン州12日撮影）

ドイツ

同事業はドイツ、ノルトライン・ウェストファーレン州デュイスブルク市のドイツ人家庭にホームステイをしながら国際交流の促進、海外県系人社会の活性化に努め、世界のウチナーネットワークの輪を広げる次世代の人材育成が目的。県国際交流財団の国吉孝子さん、特定非営利活動法人沖縄NGOセンターの上間明さんが引率した。

初日は平和学習の一環として、教育・内政で講演を行ったり、子どもたちを受け入れて交流する歓迎のドイツ国歌斉唱行事をした。

2日目はノルトライン・ウェストファーレン州環境庁を訪問、ドイツの開発を抑止して再生可能エネルギーへの転換を図る環境政策について学んだ。午後は広島の高校生との体験交流、視察訪問や表敬訪問など、ドイツ、沖縄の高校生、中国の学生との有意義な交流会が持たれた。

7日目にはデュッセルドルフ日本国総領事館、日本クラブ、日本商工会議所を訪問。総領事館では、日本語講座に出席の上竹内勇さんが新内閣と紹介。参加者の宮久田彩さんは「外交官の仕事や大使館との違いなど興味深い話が聞けて勉強になった。こんなところでもウチナーンチュがいるのだと思ったことになった」と感想を述べた。

ドイツの学校は独入学で、初級中級学校間で、沖縄で事前に協議したテーマ「ドイツと沖縄との関係、歴史的なドイツの教育（平和教育など）」で意見交換した。

また、長浜大佑さん、宮久田さん、新垣博昌さんが三線を披露し、ドイツの学生に沖縄をアピールした。

23日には、デュッセルドルフ中央駅に隣接するはぎ人教育機関で、琉球フェスティバルが開催され、ビデオによる沖縄の文化・観光、沖縄の三線演奏と歌の紹介、空手・古武道のデモンストレーションがあった。

沖縄から参加した宮久田さんのカチャーシーの踊りや学生によるマミドーマー、クイチャー、空手・古武道の千原エイサーの舞が披露され、最後はカチャーシーで幕を閉じた。学生たちは、最初は緊張気味だったが、最初の沖縄から練習を積み重ねていた成果を発揮、クイチャーの時は会場のあちこちで盛り上がるとは思わなかった。会場が一体となり、クイチャーを踊っているときはとても楽しかった」と感想を述べていた。

アミリーを巻き込んで踊り、最後のカチャーシーでは、会場が一体となった。

イツ人パートナー、ホストファ

沖縄タイムス　2015年9月14日(月)